

## 資料2

## ささやま医療センターの産科充実に向けた検討会準備会（要旨）

日時：令和元年5月25日（土）19：30～21：30

場所：丹波篠山市立丹南健康福祉センター 36名参加

	所 属	名 前
1	丹波篠山市市長	酒井 隆明
2	丹波篠山市副市長	平野 斉 (欠)
3	丹波篠山市医師会 会長	芦田 定
4	丹波篠山市医師会 副会長	小嶋 敏誠
5	丹波篠山市自治会長会	西潟 弘 (欠)
6	丹波篠山市民生委員・児童委員協議会	藤井 節子
7		出口 玲子
8	丹波篠山市愛育会 会長	太田 鈴子
9	人と夢をつなげ隊	中村 貴子
10	兵庫医科大学ささやま医療センター支援グループささゆり	松本 正義
11	在宅助産師	深田 和泉
12		高瀬 晶子
13		成瀬 都
14	在宅保健師	稲川 なをみ
15	市民委員	稲川 沙弥佳
16		畑 弘恵
17		加古 佳与子
18		福井 友香 (欠)
19		高橋 祥子
20		向井 真基子
21		谷岡 春南
22		田村 博子

1	顧問 兵庫県議会議員	小西 隆紀
---	------------	-------

傍聴者：田村議員 健康課職員6名 事務局：横山、仁木、堂東、小西、吉田、山下

## 1. 開会あいさつと経過説明

(酒井市長)

丹波篠山市になってこれからというとき、ささやま医療センターの産科の件についての課題が出てきた。市民の皆さんと検討していきたい。

### 【今回の経緯説明】

- 5月10日 県医務課長から、ささやま医療センターの分娩を休止するという意向と報告があった。
- 5月17日 太城理事長にお会いして状況を伺った。2人の産科医では安全なお産ができない。安全性を確保するためにささやま医療センターの分娩を休止したい意向であることを確認した。
- 5月20日 丹波篠山市議会に報告した後、記者発表し、検討会を立ち上げて、市民上げて方向性を考えていくことを説明した。
- 5月23日 太城理事長、片山院長、田中産婦人科医で意向を確認した。

### 【ささやま医療センターの変遷説明】

20年前に国立篠山病院から兵庫医大に移譲となった。10年前に撤退の方向性があったが、中核病院としてはなくてはならないものと考えた。産科、小児科は当時も課題であったが、欠かせることが出来ないとお願ひし、新家理事長、池田先生にご尽力いただいた。現太城理事長が説明をされた分娩休止の理由は「チームで分娩をする。市民の安全な出産のためには産科医二人では分娩することが出来ない。安全の確保が市民のためになる。」というものであった。ささやま医療センターには1億2600万円と、別に3病院に9千万円を支払っている。

市民の意見を聞かずして市長が決めるものではない。市民の皆さんと話していきたい。

## 2. 自己紹介と意見

A ささやま医療センターで分娩3人お世話になった。お母さんの声を聴くと、存続していただきたいという声が多い。その方向でうまくいくことを願う。

B 丹波篠山市での大きな問題であり、市議会でもしっかり議論を尽くさないといけないと思っている。

C 前回、261自治会長会で、260名の署名を集めて存続できた。ささやま医療センターとにしき記念病院でのボランティアを行っている。

D 分娩は残ってほしい気持ちが強いが、全国、関西でも大津病院、弥栄病院でも分娩できなくなった。いよいよ篠山にも来たかという思い。医師募集してもなかなか集まらない、太城理事長や片山院長の言われることもわかり、複雑な気持ちである。しかし、できるだけ存続に向けて話し合えたらと思う

E 調印式後、すぐにこのような話が出来て驚いている。医師会としても存続してほしいと思うが、兵庫医大の状況も理解できる。池田先生の献身的な働きがあったからこそ今まで存続できた。廃止は篠山の活性化や、虐待防止にも及んでいく。医師会としては産科医に残っていただきたい。

F 安心して暮らせる街には安心して出産できる場所がある。池田先生に感謝の気持ちを届けた。報道に納得していない。経営状況などもっと情報が欲しい。分娩数が少ないが増やしていくことは可能か、また、チームで分娩について教えていただきたい。

G これからの問題は人口問題、そのために産科は丹波篠山市に残してほしい。池田先生が大切に思ってくれたささやま医療センターを存続してほしい。

H 妊娠中から音楽を通じて赤ちゃんがすくすく成長できることを目指し、ララバイプロジェクトを立ち上げた。丹波篠山市でも展開できないかと考えていた矢先に、このような状況を知りびっくりした。池田先生の再任用がかなわず、残念だった。近い人に尋ねたが「誰もが、篠山で産めないことはあり得ない」と言われた。いい方向に話が進むことを願う。

I 新聞を見て驚いた。主任児童委員の赤ちゃん訪問が年々減ってきていた矢先、このことを知り、出産も少ないからかなと思った。小児科、産科がなくなるのは不安が大きい。他の地域から出産される場合もあり、不安も大きい。医療がしっかりしていないと若い人が住めない。医療をしっかりしてほしい。

J 赤ちゃん訪問は児童虐待防止、それを把握することが大切、少子化の波が押し寄せてきていることをひしひしと感じてきた。2人目3人目を出産するためにも、地元で安心して産める環境、体制を私たちが作っていかなければならない。

K 3人の母親、京都から引っ越し10年目。篠山はとても良いところだと思う。医療を省くと人が帰ってこない。産科に限らず、兵庫医大の在り方や、全国的に医師が足りないというが、医師を目指す人が多いのに足りないという理由が分からない。原因を知り、存続できる方法はないのかを考えていきたい。

L 愛育班として、地域の健康と安全の見守り、声掛けをしている。頼りにしているのは保健師さん、そのつながりで出席している。地元で出産させたい。存続を願っている。産科が存続できるようにするために、愛育会の班員の意見を聞いて参加したい。

M 医療センター産科で生んだ。2人目も希望している。存続してほしい。

N かつて京都の保健師をしていて篠山に戻ってきた。基本、産科、小児科を守りたい。地域の活性化、篠山で安心して産む拠点がなければ、人口増にもつながらない。具体的にたくさんのお母さんに意見を聞くために、アンケート調査をしてはどうか

○平成29年まで、ささやま医療センターに勤めていた。集約されようとしている丹波医療センターなら本当に安心して出産できるのか、兵庫医大に産科医が本当にいないのか。産科医2人で出産できないかを見極め、私達が知っていかないといけない。お母さんが安心して妊娠出産して育てていくためには、家族、地域、医療みんなで全部支えてやっと安心して分娩できる。当たり前の「正常」をつくるのに、医療が安全に出産するためにどれだけ準備できるかを見極める必要がある。ささやま医療センターは、医師が2名、常勤助産師が2名、24時間呼び出される状況で回している。その実情を知ったうえで、市民の皆さんの要望ができるよう、検討してもらいたい。

P5年前にささやま医療センターにいた。今、母乳育児支援をしている。市民以外のお産を入れると100件以上ある。里帰り出産も多い。無医村の地域、色々な地域があるが、篠山方式で、篠山に合致するような産科を兵庫医大でやっていただけないか。オープンシステム、助産院、院内助産で分娩を取り上げることでもできる。分娩自体は病気ではないので、昔ながらのゆっくりした助産もいいのではないかと思う。全員が病院で出産しなくても、医療に依存しなくてもいい、血の通った産科医療ができないか考える必要がある。今、助産院で助産するという人が多く来ている。ニュージーランド、フィンランドでマイ助産師、全国でも増えてきている。兵庫医大病院と同じやり方をここでやる必要があるのか、兵庫医大のマニュアルを篠山でする必要がない。池田先生はこれだけ市民に指示され、先生の力は本当に大きかった。血の通った医療をしていただいた。池田先生は無事故であり、時間をかけてお産を取り上げていただいた。篠山の産科医療を見直していただきたい。

Q 国立病院にいる時期に10年間働いてきた。15年以上前から産科、小児科は赤字部門、閉鎖したいと言われていた。その中で池田先生が頑張っていたのが存続の大きなポイントであった。就業規則を無視して365日24時間頑張っていた。今回、二人だけでは病院の就業規則を満たすことはとても無理というのは納得できる。2018年2月、ユニセフの発表では、日本が一番赤ちゃんが安全で生まれ、新生児死亡率が一番低いとの報告。2018年のデータでは、妊産婦死亡率のトップは産後の出血、妊娠高血圧症候群を抜いて1位が自殺になっている。大きな問題。高齢初産婦に多い。虐待の加害者は実母、産後うつが社会問題になっている。丹波篠山市は産後ケア事業等を頑張っていた。従事する産科のスタッフは大事。産後のお母さんが相談、子育て支援、助産師などの産科スタッフの充実が大切なのに、兵庫医大の産科医療はあまり考えていただけていない。昔からそうであったので、またかという気持ちである。思い切って、市民や里帰りの妊婦さんのために、バースセンター、市営の産科をつくるのは一つである。山梨市立産婦人科医院は、つぶれかけた産婦人科医院を全国初の公設民営の病院にして2年になり、機能している。兵庫医大に頑張ってくださいというだけではだめ。新しいことを考えていく必要がある。

R 二人の子どもがいる。元味間認定こども園の保護者会長の立場でここにいる。移住してきたので、市内どこで産めるか考えた。家が近いからとタマル産婦人科を選んだ。前期破水でこども病院に送られ2日間入院し出産。市の保健師さんに相談にのっていただき、安

心して子育てさせていただいている。今は、お産を選ぶ時代だが、残っていただけるのは安心できる。

S 川西市から4年前に移住してきた。篠山は暮らしやすい。子育ての助成も充実。近所の方が温かい。3人目を産もうと思ったのは子育て支援が充実していたから。病院は人口増には不可欠であると思う。大学病院婦人科病棟で働いている。そこでも医師不足、オンコールだらけ、周産期医療の大切さもわかる。ささやま医療センターの気持ちもわかる。複雑ではあるが母親として参加したい。

T 兵庫県が主導ではない。皆さんの提言に落としどころが見えてくるのではないかと希望を持った。産科、小児科は、それぞれの基礎自治体の中で一番大事なところである。圏域として考えた時に、柏原病院はどの位置にあるのか。一つの自治体としてどう考えるのか。池田先生の功績を無駄にしないようにしなければならない。むしろ旗を上げるだけでは解決にならない。

### 3. 意見交換

#### 【質問】

助産師の学生がささやま医療センターには来られているが、もっと来ていただけないのか分娩の時に学生に協力したが、残ってもらえないなら力不足だったのかなと思ってしまう。

#### 【回答】

助産師の数は年々増加傾向である。大きい病院に就業している。篠山にいる助産師はどれだけかわからない。丹波篠山に市名変更し全国から注目を浴びている。頑張る取り組みをしたら若い助産師が帰ってこないかなと思う。

#### 【回答】

混合病棟では、産科の仕事でもしっかりできない。助産師の仕事を認めてもらえないのでささやま医療センターを選んでもらえないのかなと思う。

#### 【質問】

総合病院だからか

#### 【回答】

そうである。産科が単科ではなり立たないからだ

#### 【意見】

6月協定なのに以外に早かった。池田先生が定年の際に残っていただきたいとお願いしたが難しかった。6年先には協定が切れる。医療センターがどれぐらいの赤字を抱えているか、何億の赤字である。不安である。柏原病院は先生の定着率が悪いので、丹波市は危機感を感じておられ、毎月話し合いをもっておられる。篠山市も10年前に危機感を持っていたら、もう少し違ったのではないかなと思う。

**【質問】**

タマル産婦人科の医療体制は？

**【回答】**

月に14、15件。患者数の波もある。チーム医療で先生がオフの時は助産師を勤務させておられる。池田先生の働き方と同じだと思う。

**【質問】**

今後どのように進めていけばいいか

**【回答】**

兵庫医大に人がいないのか、何人いるのか、配置した場合、どのぐらいの赤字が生じるのかを聞くべきだ。打開策を探さないとならない。

兵庫医大は医療のレベルが保たれ、医師確保できている。しっかり話し合っている方向を考えていけたらと思う。

**【回答】**

池田先生に頑張っていたが、全ての先生にそれを求めることが出来ない。

産科はリスクが高く、婦人科だけで開業されることもある。365日24時間できる医者はまれ。せつかく大学病院があるので、医師、助産師、当直のドクターを派遣してもらえ可能性が高いと思う。パートの医師、助産師を増やしてもらえ方がいいのではないか。バースセンターを新た立ち上げるのは難しいと思う。タマル産婦人科に集約してバースセンターをお願いして、そこに兵庫医大のスタッフを回してもらうなど、無くすというより集約して希望を保つのをゴールにできないか。

**【意見】**

小西議員が県の指導ではないと言われたが、丹波医療センターと両方が赤字、県はたんば医療センターというが、住み分けて考えられないか。

#### 4. 閉会の言葉

(横山部長)

「住もう帰ろう」を目指している丹波篠山市にとって、分娩できないという理由で篠山市を選んでももらえないのは、あってはならないこと。集約するという説明を市民にはできない。双方の意見を合わせて話し合っていきたい。